Vol.77

城西国際大学水田記念図書館

図書館だより

2024 11 Nov.

283-8555　千葉県東金市求名１番地　Tel：0475-55-8812　Fax：0475-55-3265
URL：https://library.jiu.ac.jp　　Mail：library@jiu.ac.jp

自由、正義、民主主義のフランス精神：ヴォルテールからシャルリー・エブドまで

語学教育センター　ミコ・プーノサミー

『ヴォルテールの友人』[1]（英語版 The Friends of Voltaire）は、1907 年にイギリスの作家ビートリス・ホールによって書かれた逸話形式の伝記であり 18 世紀のフランスの作家ヴォルテールを題材にしている。この本の中で、ホールはヴォルテールの言論の自由の真髄と民主主義の理想を高く評価している。「あなたの言うことには反対だが、あなたがそれについて語る権利については断固として守り抜くつもりである」（p.198-199）。ここからわかることは、啓蒙以後の西欧民主主義国家がヴォルテールから得た美徳は、検閲はいかなる形であれ、不愉快であるのと同様に専制的であるということが考えられる。

特定の空間と時間という文脈において、不条理、無益、挑発的、あるいは、不快であると受け止められる可能性のある思想、言葉、アイデアは、箝口される必要はなく、民主主義の強大で透明なプロセスを通じて理解され、議論される必要がある。ヴォルテールは 1778 年にこの世を去ったが、彼の理想とする自由、言論の自由、理性、そして政教分離による王権神授説への断固たる抵抗は、1789 年の革命への道を開いたと言えよう。例えば、1759 年に発表されたヴォルテールの風刺小説『キャンディード』[2]（英語版 Candide: or , Optimism）は、16 世紀以来、フランスの君主制と貴族が特権と豊かさの生活を正当化するために用いてきた教義である。それは、貧しく、無教育で、虐げられ、飢えに苦しむ農民の悲惨な運命を不当にも正当化するために用いてきた教義である。その点で言えば、正義、真実、美徳、権力は、宗教と君主制の独占下にとどまるべきだったと言えよう。1748 年に出版されたフランスのバロン、シャルル・モンテスキューの著書『法の精神』[3]（英語版 The Spirit of the Laws）の中で、名誉ある社会状況を批判的に振り返りながら、「法を盾に、正義の名の下に行われる暴政ほど大きなものはない」（p.46）と述べている。正義と真理は独善的に制度化することはできず、そうでなければ専制と抑圧の道具と化してしまう、とモンテスキューは指摘している。

1830 年、スタンダールとして知られるフランスの作家マリー＝アンリ・ベイルが『赤と黒』[4]（英語版 The Red and the Black）を書いた。彼は、才能と忍耐と策略によって、地方の青年が社会的な階段を上り、質素な生い立ちを越えていく物語を描いた。19 世紀のフランスでは、野心は道徳的な特質として認識され始めたばかりだった。本書はまた、統治者が国ではなく国民の王または女王となる人民の君主制を通じて、社会不安や社会変革への憧れが急増していたことも把握している。1800 年代初頭は、社会主義への哲学的・政治的推進力が君主の役割と地位を再定義していた時代であった。1830 年にヨーロッパで起こった強力な革命の波は、フランス、ベルギー、イギリス、オランダ、ポーランド、イタリア、ポルトガル、スイスに人民の君主制を誕生させた。しかし、今日、人民の君主制をとっているのはベルギーだけである。その意味において、フィリップはベルギー人の王であり、ベルギー王ではないと言えよう。

近年、1949 年にフランスの作家、フェミニストであり活動家であるシモーヌ・ド・ボーヴォワールが『第二の性』[5]（英語版 The Second Sex）を著し、性的解放を求める女性の権利を主張した。ボーヴォワールは、経済的、社会的、道徳的、知的に劣っていながら、男性の偉大さを彩る美しい装飾品に過ぎないとされる女性の役割に異議を唱えている。伝えられるところによれば、ここでは、欲望にまみれたレズビアンの性に関する露骨な文章があったため、バチカンは『第二の性』を非難し、禁止図書リスト（Index Librorum Prohibitorum として知られる）に加えた。これに関しては、1966 年に禁止政策自体が廃止された。

一般的かつ包括的な用語で書籍に言及するのであれば、絵やコミカルで攻撃的なジョークを特徴とする現代のフランスの風刺雑誌であるシャルリー・エブドという雑誌に言及する必要があるであろう。1992 年の創刊以来、主に政治家や宗教家に対する挑発的な風刺画、さらには冒涜的な風刺画によって、同誌は何百件もの訴訟をひき起こしてきた。長年にわたり、フランスの政治に大きな影響力を持つ人物たちが、シャルリー・エブドの扇情的な編集方針を公に批判してきた。しかし、ヴォルテールの精神に忠実な彼らは皆、同誌の言論の自由を支持することを明らかにした。2011 年、2015 年、2020 年の 3 回、シャルリー・エブドはテロの標的となった。2015 年の 2 度目のテロでは、出版ディレクターのステファン・ジャンニアベル・ミシェル・シャルボニエ（通称シャルブ）を含む 12 人がテロにより殺害される事態となった。フランス人アートディレクター、ジョアキム・ロンサンによる、言論の自由と武力による威嚇、抑圧、専制政治への抵抗を支持するスローガン「Je suis Charlie」（「私はシャルリー」）は、もしかしたら今でも世界の人々の記憶に残っているかもしれない。

1789 年の革命の精神は、何世紀にもわたり、フランスの非常に豊かな文学遺産に意味と誇りを与えてきた。この精神は、フランス社会の文化的、政治的、そして知的な構造において、今もなお強く感じられ、我々は実際に革命について耳にし、また目にすることができる。例えば 2018 年、フランスでは厳しい経済格差と物価上昇が「la Révolution des Gilets Jaunes」（「黄色いベスト革命」）を引き起こし、毎週の抗議行動（時には平和的に、時にはそうでないこともある）が苦境に陥った国家を再び揺るがした。何十万人もの人々が、不公正と抑圧に直面し、その声を届けるために街頭に繰り出した。このことからは、革命は生き続けていることがわかる。フランスの精神においての支柱である革命に万歳をささげたい。

参考文献

(1) 『ヴォルテールの友人』 Hall, E.B. (1906). *Friends of Voltaire.* London: John Murray.

(2) 『キャンディード』Voltaire. (1959). *Candide, ou l'optimisme*, R. Pomeau éd., Paris: Magnard.

(3) 『法の精神』Montesquieu. (2008). *De l'Esprit des lois*. Paris: Librairie de Firmin Didot freres, fils et Cie.

(4) 『赤と黒』 Stendhal. (1997). *Le Rouge et le Noir.* Paris: Gallimard

(5) 『第二の性』 De Beauvoir, S. L. B. (1949). *Le deuxième sexe.* Paris: Gallimard